富士山と静岡の人々

元静岡県立大学非常勤講師
郷土歴史研究家
黒澤　脩　氏

経歴
1946年、中国徐州生まれ。神奈川大学経済学部貿易学科を卒業。静岡市教育委員会事務局参与を最後に退職。現在は静岡市教育委員会のスペシャリスト派遣事業で、小中学生の「郷土学習」を対象とした出前講座を通じ、「静岡と日本文化」を大切にする心を子供たちに伝えている。

静岡市指定文化財「駿府鳥瞰図」土佐光成作。18世紀初頭（1707年噴火の宝永山を描写）。原本所蔵:駿府博物館（公益財団法人 静岡新聞・静岡放送文化福祉事業団）。家康没後、駿府城天守閣は焼失し、人口は15万から1万に減少。

富士山を愛した家康の街づくり

駿府城下町は富士山の魅力が全開

二年で将軍職を辞任した徳川家康は、江戸を息子に任せて駿府に移った。自ら描く理想国家建設の活動拠点として、家康は、なぜ駿府を選んだのか?

①幼少年時代12年間、今川家人質として駿府で生活していた。

②駿府の気候・環境・地形を熟知していた。

③江戸・大坂のほぼ中間で、天下の形勢を掌握し諸大名の動向を監視する絶好の位置。

④駿府に居ながらにして江戸政治をリモートコントロールできた。

⑤富士山が好きで、お米も美味しく、老後を養う温暖な適地であった。

では、家康の目指す駿府大御所王国とはどのような街か?　駿府城天守閣と城下町は、富士山を借景に最大限利用し、天下人のシンボルとして美を追求した。こうして完成した駿府城下町は、江戸時代最初に完成した城下町として全国から注目されていた。

天下人の聖地・駿府の実像

家康は、平和のシンボルに富士山を導入し、大胆な都市計画を行った。元東京都立大学教授の桐敷真次郎氏は、論文「慶長・寛永期駿府における都市的景観設計および江戸計画との関連」で位置・角度・高さなど数学を駆使して、その実像を明らかにした。それは富士山が無言で、城と城下町を

冨嶽三十六景「江都駿河町三井見世略図」葛飾北斎作。
駿河町（現・東京都千代田区日本橋室町2丁目、三越の所在地）からは、富士山が美しく見えた。

優しく抱擁し、眺める人に天下人の居住地たることを実感させた都市設計であった。

西から来る旅人は、安倍川を徒歩で渡って駿府城下町の西側（弥勒）に到着する。安倍川川越の間は、きつい流れを横切り必死に水と闘いながら川岸に到着する。漸く落ち着いて前方に視線を伸ばすと、一転して、見たこともない見事な天守閣が富士山を背景に凛と佇む姿が目の中に飛び込んでくる。

前代未聞の完成度を誇る江戸時代最初の駿府城下町の美しさに圧倒されながら、旅人は五層七階建の巨大な天守閣に徐々に接近した。大きく聳える天守閣の背景には、更に大きな富士山が天守閣を抱きかかえるように見えた。美しい自然美と人工美の競演を眺めた旅人は、平和の到来を確かなものとして実感したであろう。これこそ家康が目論んだ大きな仕掛けだった。

天守閣を見せるビューポイントまで考えた駿府城下町

駿府城下町を通過すると、旅人たちは更なる驚きに遭遇した。それは、

①黄金に輝く美しい天守閣

②富士山を背景に、平和なたたずまいに圧倒された

③城下を走る東海道に、天守閣と富士山を見せる絶好なビューポイントを配置

④人工美と自然美の競演

人々は平和への予感を感じ、癒されながら旅を続けた。駿府城下町は四次元の世界に入り込み、大御所様の都として駿府を実感したはずである。江戸に到着すると、今度は日本橋から駿府の方角に再び富士山の雄姿を遥拝する仕掛けとなっていた。

家康は厭離穢土・欣求浄土の浄土を、駿府からスタートしたと考えられる。

江戸の街は、駿府城下町の裏返しの街づくり

寛永十二年（1635）、江戸の街は、溜池と牛込の西北部が完成し、総構えの江戸城も完成した。日本橋駿河町は、家康没後に駿府から移住した人たちが造った町である。この町から江戸城方面を眺めると、駿府同様に雄大な富士山が背景として再び登場する。江戸の街も、富士山を見せる設計となっていた。

富士山が見えない場所には、小さな山を盛り上げて富士山を信仰した。それぞれの土地のシンボルとして、こうしたミニ富士山が造られたのも江戸の情緒となった。